埼玉県立近代美術館

MOMAS コレクションⅢ期　特別出品
2023.01.06-02.26

諫山元貴　｜　Order#10

「崩壊と複製」をキーワードに、制御できない出来事によって物質が変化していく様子や瞬間を、映像や立体で表現する諫山元貴。諫山の映像シリーズは既製品を複製し、それが水中で崩れていく様子を定点撮影したものであり、速度編集無く無音の状態で再生されている。今回 MOMAS コレクション企画「まるく/まわる」に、円筒形の物体が崩れ去るイメージがループする映像作品を出品。塩ビパイプを型どった土の円柱は、一見それぞれ異なる 11 本の個体のようだが、実際は同一の円柱で、映像編集により時間をずらして再生されたものである。映像は円環構造となっており、次々に崩れては再び現れる円柱のイメージが終わることなくくり返し展開する。円環をテーマとする埼玉県立近代美術館のさまざまな収蔵品と響き合い、異なるモノの間で流れる時間への意識が呼び覚まされる。

▌Artist's Statement

ある日の夜、全裸で海に入りました。大きなものに飲み込まれる恐怖と、海と一体になる快感が同時に起こりました。自分の身体という物質が固有の個体であることを強く感じながら、元の全体へ還っていくような経験でした。

幼少期に読んでいた手塚治虫の漫画 『火の鳥』の「生命編」（1980）は、クローン人間をテーマにしており、今でも、いや今だからこそだんだんとトラウマのように人間のモノ（mono と Object）化に恐怖を覚えます。傷がついたり、壊れたら交換できる製品のように、クローン技術や IPS 細胞などの技術によって身体さえも複製されていくシステムが出来上がりつつあるのではないでしょうか。

私が唯一オリジナルだと感じることは、自身の身体の衰えであり、究極の決まり事であるその朽ちていく「時間の経過」だと考えています。それは短くも長くも感じてしまうような主観でみる時間とは違う時間軸です。

社会的に機能する時間（時刻）や身分から解放され、物質としての身体がただそこにあると感じられる場所と日常とを往来するような作品をつくりたいと思っています。

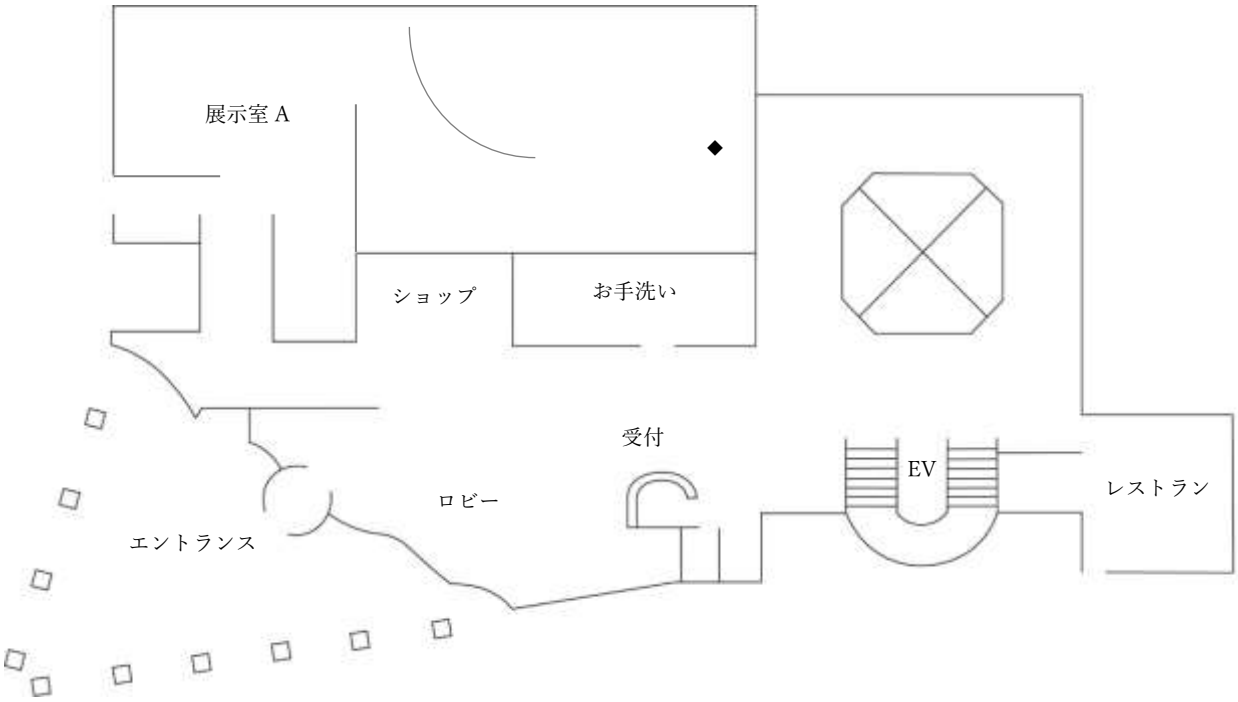
— 諫山元貴

▌Artist's Biography

1987 年大分県生まれ、現在広島県在住。2009 年京都造形芸術大学美術工芸学科卒業、2011 年広島市立大学大学院芸術学研究科博士前期課程修了。2014 年吉野石膏美術振興財団在外研修助成にてベルリンに滞在、Studio Haegue Yang のレジデンスプログラムに参加。主な展覧会に、2022 年「高松コンテンポラリーアート・アニュアル vol.11」（高松市美術館、香川）、2021 年「個展 BankART Under 35 2021」（BankART KAIKO、横浜）、2016 年「Sights and Sounds:Japan」（ユダヤ博物館、ニューヨーク）など。主な作品収蔵先に広島市現代美術館、ポモナ大学付属ベントン美術館などがある。

▌展示作品

◆ 《Order#10》 シングルチャンネル・ヴィデオインスタレーション
｜ プロジェクター ｜ループ映像（音声なし）｜ 2022 年 ｜作家蔵



* 写真撮影と SNS への投稿が可能ですが, 動画・フラッシュはご遠慮ください